

観光資源保護におけるナショナル・トラスト活動の役割について、私の提案

震災関連行事に対する人々意識の変化とその観光資源化の問題

- 阪神・淡路大震災の伝承、神戸ルミナリエを事例として -

神戸夙川学院大学 観光文化学部 観光文化学科  
歴史文化ツーリズム 高根沢ゼミ

上月 良子・小西 芽理・白石 亜希・松下 稜・村上 有紀・山本 元彪

# 目次

## 目次

1. 序論
2. 阪神・淡路大震災と神戸ルミナリエ
  - 2-1. 阪神・淡路大震災について
  - 2-2. 神戸ルミナリエの誕生と開催の目的
  - 2-3. 神戸ルミナリエの現状と問題点
3. 新聞記事から見る神戸ルミナリエに対する意識の変遷
  - 3-1. 新聞記事に見る意識の変遷
  - 3-2. 来場者の意識変遷に対する神戸ルミナリエの取り組み
4. 震災モニュメントとその意味
  - 4-1. 『慰霊と復興モニュメント』について
  - 4-2. 震災モニュメントの例
  - 4-3. 震災モニュメントの課題
5. 結論

## 1. 序論

世界でも有数の地震大国である日本は、その歴史の中でも幾度となく未曾有の震災に遭ってきた。その度に多くの尊い命が失われ、彼らを偲ぶ思いはやがて慰霊祭として各地で節目の時期に催されている。その中でも兵庫県南部を襲った戦後最大規模の阪神・淡路大震災は、我々の学ぶ神戸で犠牲者の鎮魂などを目的としたイベントに形を変えて語り継がれている。その代表的なものは神戸ルミナリエであろう。しかし、神戸ルミナリエについて、単なる神戸のイルミネーションイベントや冬の風物詩と思っている人も多いのではないだろうか。

本論では神戸ルミナリエの運営と来場者の意識の変容について新聞記事を通じて検証し、また現在の神戸ルミナリエと阪神地域の他の震災モニュメントやイベントの抱える問題を調査する。その結果を踏まえて、震災メモリアルイベントという文化財としてナショナル・トラストの保全対象への位置づけと、新しい観光資源としてどのように残すべきなのかを提案する。また本調査を通して、まだ記憶に新しい東日本大震災のメモリアルイベントの在り方や方向性についても提案したい。

## 2. 阪神・淡路大震災と神戸ルミナリエ

阪神・淡路大震災は、1995年1月17日午前5時46分に近畿地方を中心に発生したマグニチュード7.3という戦後最も大規模な地震であった<sup>1</sup>。震災による物的被害の規模は大きく、また人々の心には深い傷跡が残された。その後、家屋やインフラなどの外面的復興は迅速に進んだが、人々の内面的復興の状況は目に見えず不確かなままである。なお、ここでの外面的復興とは物的に被害を受けたものを再生することを指し、内面的復興とは震災の被害にあった人々の心の傷や悲しみなどを癒すこと指す。

1995年12月、第1回神戸ルミナリエは犠牲者の追悼と復興資金を募ることを主な目的としてスタートした。そのイルミネーションの試験点灯時には『明かりがつくたびに、居合わせた市民からはため息が漏れた』<sup>2</sup>という。被災者である彼らはその光の中に何を見て、何を感じたのだろう。本章は阪神・淡路大震災と神戸ルミナリエの概要を整理するとともに、現在の神戸ルミナリエが抱える問題を提起する。

### 2-1. 阪神・淡路大震災について

当初、気象庁によって「兵庫県南部地震」と命名されたこの地震がもたらした被害は以下のようなものである<sup>3</sup>。

#### (1) 人的被害、住宅被害

震災の被害者数はのべ50,229人である。うち、死者総数は6,434人、行方不明者3人、負傷者43,792人となっている。また、阪神・淡路大震災での住宅被害総数は639,686棟。うち、全壊は104,906棟(186,175世帯)、半壊は144,274棟(274,182世帯)、一部損壊は390,506棟である<sup>4</sup>。

#### (2) ライフライン被害

<sup>1</sup> その後、東日本大震災がマグニチュード9.0を記録し、戦後最大の震災となった。

<sup>2</sup> 神戸新聞 1995年12月14日夕刊掲載。

<sup>3</sup> <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/directory/eqb/book/11-468/html/index.html> 『阪神・淡路大震災 被害調査報告書 阪神・淡路大震災の概要』 (2012年11月26日参照)。

<sup>4</sup> <http://www.fdma.go.jp/detail/672.html> 『総務省消防庁災害情報阪神・淡路大震災について(確定報)』 (2012年11月15日参照)。

人々が日常的に使用しているライフラインも多大な被害を受けた。代表的なものとして、ガス、水道、電気、電話回線などがあげられる。先3つはそれぞれ、供給停止によりガス約86万戸、水道約130万戸、電気約260万戸に影響がでた<sup>5</sup>。このため、神戸市は他の大都市に応急給水を要請した。また、電話回線については電話不通が30万回線を超え、全国からの神戸への電話はピークの50倍輻輳を起こした。

### (3) 道路橋被害

震災は道路や橋にも大きな被害を残した。当時、テレビや新聞で報道されて有名になったが、阪神高速道路神戸線や名神高速道路の各所で橋脚のせん断破壊や落橋などが発生し、交通機能にも多くの障害がでた。これらの被害が発生した理由は、設計の際に想定された震度をはるかに超える揺れが生じたからである<sup>6</sup>。

### (4) 経済的被害

震災による直接的被害総額は9兆5060億円であり、間接的なものも含めれば40兆円とも言われている。そのうち6割にあたる5兆8000億円は建築物の被害額である。また、国内生産に占める阪神経済圏の割合は1991年の時点で17パーセントに及んでおり、阪神経済圏の経済活動の停止は日本経済にとっても大きな影響を与えた<sup>7</sup>。

このように阪神・淡路大震災の被害は甚大であったが、国や市町村を中心に世界からも様々な支援が寄せられた。震災発生から1ヶ月の間に集まったボランティアは約62万人。累計で200万人以上のボランティアが被災地の復興に携わった<sup>8</sup>。兵庫県は平成7年に「兵庫県南部地震災害対策総合本部」及び「阪神・淡路大震災復興本部」を廃止しており、公的には神戸の復興に要した期間は約10年であったといえる。また、現在の神戸の街並みや行きかう人々の様子を見れば、経済活動などの外面的復興を遂げたといっていよう。一方で、内面的復興への取り組みもあった。その象徴として挙げられるのが神戸ルミナリエである。

## 2-2. 神戸ルミナリエの誕生と開催の目的

神戸ルミナリエは、兵庫県神戸市で催されている阪神・淡路大震災のメモリアルイベントである。ルミナリエ<sup>9</sup>はイタリア人アートディレクターであるヴァレリオ・フェスティ氏<sup>10</sup>と、プロデューサーである今岡寛和氏<sup>11</sup>の共同作品であり、もともとは関東で「東京ミレナリオ」<sup>12</sup>として催される予定だった。しかし、同時期に今岡氏の出身地である神戸が震災に見舞われた。そこで彼は、被災地である神戸が前向きな事を始めるきっかけとして、闇を打ち消す光が象徴的に必要なのではないかという思いを抱き、急遽そのイベントを神戸で開催することとした。神戸ルミナリエは阪神淡路大震災で亡くなられた方々への鎮魂の願いと復興資金を募る目的があり、また震災で打ちひしがれた神戸のまちの復興と再生を、幾度も立ち直ることができる不

<sup>5</sup> <http://www.fdma.go.jp/detail/672.html> 『総務省消防庁災害情報阪神・淡路大震災について（確定報）』（2012年11月14日参照）。

<sup>6</sup> <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/directory/eqb/book/11-468/html/index.html> 『阪神・淡路大震災 被害調査報告書 阪神・淡路大震災の概要』（2012年11月15日参照）。

<sup>7</sup> <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/directory/eqb/book/11-468/html/index.html> 『阪神・淡路大震災 被害調査報告書 阪神・淡路大震災の概要』（2012年11月16日参照）。

<sup>8</sup> <http://www.dri.ne.jp/shiryo/pdf/news/021.pdf> 資料室ニュース vol.12『阪神・淡路大震災とボランティア』（2012年11月15日参照）。

<sup>9</sup> 16世紀後半（ルネサンス末期）にイタリアで誕生した「光の魅力を駆使した建築物」に起源をもつ。イタリア語では「Illuminazione per feste」（「祝祭のためのイルミネーション」）を意味する。現在では「幻想的な光の芸術」を指し、デザインにより三次元的芸術空間を生み出す。

<sup>10</sup> 1953年、イタリア・ボローニャ市で生まれる。祝祭の舞台芸術プロデュースを行うアトリエ「STUDIO FESTI」代表。

<sup>11</sup> 1961年、兵庫県神戸市に生まれる。ルミナリエ日本総代理人、(株)アイ・アンド・エフ代表取締役。

<sup>12</sup> <http://www.millenario.com/> 東京ミレナリオ公式HP（201年11月28日参照）。

死鳥になぞらえて、光のモニュメントの中で表現している。

美しい光で人々の心を癒す神戸ルミナリエは、震災からわずか 11 ヶ月で初めて開催され、そして今もお神戸の震災イベントとして毎年 12 月上旬に開催されている。2011 年には『この冬見に行きたいイルミネーションランキング』で第 1 位を獲得した<sup>13</sup>。まだ 18 年という年月は歴史としては浅いが、知名度も高く震災イベントとして確立していることから、震災を契機に誕生した年中行事という形の新たな無形文化とも捉え得る。その点で、ナショナル・トラストが対象としうる文化的観光資源とみなすことができるのではないか。しかし、回を重ねていくに連れて、神戸の他地域への発展、あるいは観光資源としての側面、被災者の内面的復興という目的など、いくつもの要素が並立するようになった。これらすべてを維持しようと努める中で、以下のような問題が指摘されてきた。

### 2-3. 神戸ルミナリエの現状と問題点

神戸ルミナリエは 1995 年以來毎年絶えることなく開催されてきたが、平行して様々な問題やイベント内容に対する是非が議論されている。

まず、神戸ルミナリエの外面的な観光資源化が挙げられる。下記の表から、1995 年の震災により神戸市の観光は大きく落ち込んだことがわかる。しかし 2006 年になって各観光施設は震災以前の水準を回復し、入り込み客数も安定するなど外面的には復興を遂げ、神戸ルミナリエは神戸の冬の風物詩として定着した。神戸観光を訪れる人々が年々増加するなか、神戸ルミナリエは毎年約 400 万人前後の実績を上乗せしており、神戸の観光入り込み客数に与える影響は未だ大きい。

1994～2009 年 観光入込客数の推移

(万人)

年	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
神戸ルミナリエ	-	194	309	396	492	486	424	461	423	456	492	395	419	368	336	319
その他市内観光	2,440	880	1,753	1,880	2,036	2,107	2,095	2,054	2,149	2,213	2,320	2,290	2,499	2,473	2,525	2,696
合計	2,440	1,074	2,062	2,276	2,528	2,593	2,519	2,515	2,572	2,669	2,812	2,685	2,918	2,841	2,861	3,015

(出典：神戸市公式 HP「神戸観光データ」一部抜粋 筆者作成)

震災から今年で 18 年、被災者の心の中には未だにそのときの記憶が深く刻まれているが、時間の経過とともに社会全体の震災に対する記憶が薄れていることも事実である。それは、内面的な復興を意味すると捉えてよいのだろうか。震災の記憶があまりない年代や県外からの来場者は、クリスマスイベントや冬の風物詩として認識している人々が多いが、被災者の人々にとっては開催当初の目的である「犠牲者の追悼や復興への希望の光」という認識は変わらないだろう。被災者の人々は、現在でも当時の記憶が生々しく胸にのこり、精神的な復興への途上にいる<sup>14</sup>。

そのような来場者間の認識のギャップを埋め、かつイベントの目的達成および継続のために、神戸ルミナリエの主催者側は様々な工夫や努力を続けている。例えば、1995 年から 2004 年までの間に毎年 12 月 25 日

<sup>13</sup> <http://4travel.jp> フォーストラベル『2011 年 この冬一番見に行きたいイルミネーション』(2012 年 11 月 8 日参照)。

<sup>14</sup> <http://www8.kobe-np.co.jp/blog/shinsai16/2011/01/17/> 神戸新聞 2011 年 1 月 17 日の震災記念式典に関する記事に対して寄せられた被災者のコメント (2012 年 11 月 28 日参照)。

前後まで行われていた神戸ルミナリエは、2005年から開催期間の繰り上げがなされた。これは、主に神戸の地元企業や商業施設のクリスマス商戦に配慮したためであり、また来場者集中による危険を避けるためであった。この取り組みは祝祭としてのクリスマスとの差別化を図る一方で、神戸における商機の拡大をもたらす商業的価値を神戸ルミナリエに見いだした結果であろう。もちろん当初は復興資金を募り、神戸のまちを経済的にも復興させようという目的もあったが、現在ではそのような外面的復興は遂げられたため、神戸ルミナリエは神戸の観光資源と化しているといえるだろう。

ちなみに、2011年の第17回神戸ルミナリエの開催趣旨は以下である。

- ① 阪神・淡路大震災の犠牲者の鎮魂と都市の復興・再生への夢と希望を託すと共に、大震災の記憶を永く後世に語り継いでいくメモリアル行事として開催する。
- ② 神戸の冬の集客観光促進事業の柱として、行事開催を通じた神戸地域への集客と経済波及効果を期して開催する。
- ③ 神戸から東日本の被災地へ、犠牲者の鎮魂の祈りと復興支援のエールを送る行事として開催する。

(出典：神戸市・平成22年度事業別行政コスト計算書「神戸ルミナリエの開催支援」)

上記の①にあたるのは、当初の目的であった「鎮魂・希望の象徴」、②にあたるのは神戸ルミナリエの「風物詩・観光資源化」、③にあたるのは「新たな被災地へ支援」と目的の幅が広がっている。しかし、来場者に対して正確にその趣旨を伝えられているのか、もしくは来場者がその趣旨を理解しようとしているのかは疑問である。犠牲者・被災者の内面的復興の目的がぶれ、外面的復興を遂げた神戸をアピールするイベントとしてのイメージ化が進み、さらに新たな被災地支援への参入と、本来の開催目的の変容と不明瞭化が強まりつつある。

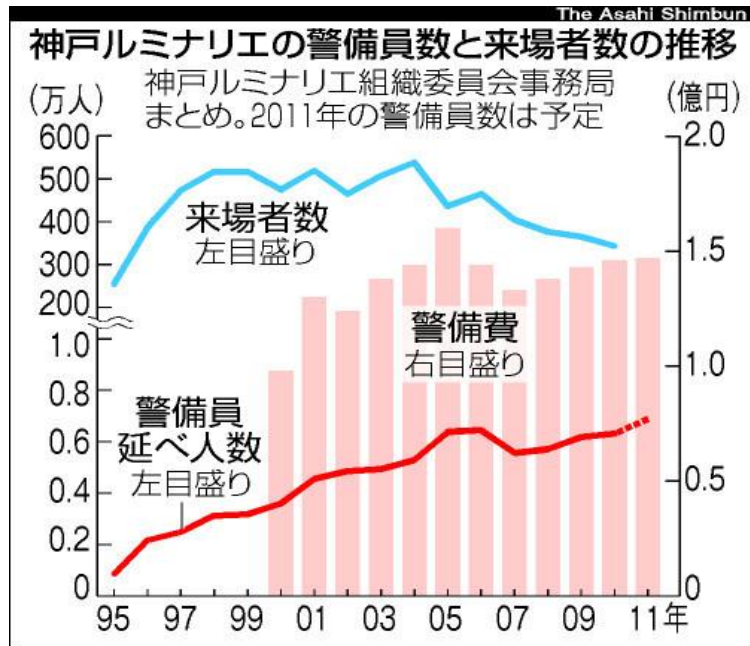
さらに、開催費用が莫大であることも、神戸ルミナリエの経済的側面が注目される理由として挙げることができる。神戸ルミナリエは震災後1年も経たない時期に開催され、当時から開催資金の問題は存在してきた。神戸ルミナリエの開催費用は毎年約1千万円の電気代をはじめとして6億円といわれるが、公的な助成金として神戸市から支給されるのは約1億円である。その他の資金は企業協賛金や市民や観光客の募金に頼ってきたが、長引く不況の影響により協賛企業の減少が続き、結果的に来場者からの募金で賄う形になっている。しかしそれは来場者数の推移に強く影響され、規模の拡大と縮小を繰り返しながら、毎年継続が危ぶまれているのが現状である。

また、神戸ルミナリエ来場者数の変遷は以下の通りである。1995年にはじまってから来場客数は毎年増加し、2006年には連休と天候にも恵まれ、過去最高である538万人の来場者を記録している。それ以降は開催期間の短縮等もあり減少傾向にある。一方で警備等の費用が近年大きく問題視されている。下に挙げたグラフに見られるように、警備などの空間管理費は年々増加する一方である。2001年7月に同県明石市の花火大会で見物客が殺到し、歩道橋で死亡事故が起きたことをきっかけに、神戸ルミナリエでも警備の強化が図られたのだ<sup>15</sup>。しかし、上記のように減少する来場客数に相反して増加する警備費は、近年の神戸ルミナリエの財政を圧迫している主要な原因のひとつとなっている。

これらの問題を抱えた神戸ルミナリエに対する人々の意識の変容について、次章において新聞記事を参照しながら検証する。

---

<sup>15</sup>朝日新聞2011年12月13日朝刊、『光の祭典、警備費が影 明石歩道橋事件後に増加 神戸ルミナリエ(大阪)』参照。



(出典：朝日新聞 2011年12月13日夕刊)

### 3. 新聞記事から見る神戸ルミナリエに対する意識の変遷

神戸ルミナリエは、2000年に、被災地に観光客を取り戻すことを目指す「観光ひょうご復興推進協議会」と県により、『阪神・淡路百名所ガイドブック』にも選ばれるまでになった<sup>16</sup>。同年のルミナリエの来場者分布は、神戸市内 21.2%、同市以外の県内 16.7%、県外の関西圏 44.5%、そのほか 17.6%であったことも、ルミナリエに対する観光資源イメージの定着を示しているように思える<sup>17</sup>。

しかし、このイベントは復興イベントとして始まったものであり、本来のルミナリエの意義に対する神戸市民のイメージと、近年の観光客のイメージは大きく変わっているのではないだろうか。

ここで、1995年から2011年までの朝日新聞の記事を概観し、世間の神戸ルミナリエに対する関心の変遷について考えていきたい。

#### 3-1. 新聞記事にみる意識の変遷

西暦	記事に書かれた内容
1995	<ul style="list-style-type: none"> <li>ルミナリエ開催により、震災後止まっていた観光客が動き出した。</li> <li>24日は多くのカップルと家族連れでにぎわった。</li> <li>好評により開催期間延長を試みたが、イタリアの技術担当の日程が変えられず断念。「来年も開催してほしい。」という声が多かったので、主催者側は検討したいと答えている。</li> </ul>
1996	<ul style="list-style-type: none"> <li>昨年のルミナリエの経済効果は『333億円』。</li> <li>このイベントの趣旨である『被災者の魂の鎮魂と復興』を意識している人が少ないことが窺</li> </ul>

<sup>16</sup>朝日新聞 2000年5月24日朝刊、『語り継ごう震災の教訓 県などが「百名所ガイドブック」(兵庫)』参照。

<sup>17</sup>朝日新聞 2000年12月27日朝刊、『神戸ルミナリエ、「県外から」6割 組織委が来場者調査(兵庫)』参照。

	<p>える。(近畿2府4県と岡山県の企業を対象に実施)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 昨年は住宅の政策が主であったが、この年より経済の活性化に繋がる産業復興支援を求めているのが特徴である。</li> <li>・ イベントが復興特定事業に認定された。</li> <li>・ 国からの支援により、冬観光の目玉にしたいと考える。</li> <li>・ イベントの規模拡大により地元の協賛企業の負担が増加。</li> <li>・ 地元民はこのイベントに対し「復興に役立っている。」と言っている。</li> </ul>
1997	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ この年の神戸の観光客数は昨年より1割増えて2,276万人。この中の396万人がルミナリエ来場者であり、神戸観光の回復に大きく貢献しているといえる。</li> </ul>
1998	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 神戸コンチェルトはルミナリエを年末商戦からはずした。</li> <li>・ この年に震災前の観光客を超えた。</li> </ul>
1999	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 別の場所でも、ルミナリエの開催を行ってほしいという声が挙がった。</li> <li>・ このイベントを見に来ると、震災を思い出すという意見も挙がる。</li> <li>・ イベント実行委副会長「ルミナリエは残さなければならない催し。実施5年目を期に運営方法を変えたい。」</li> <li>・ 1月に開催してほしいという声も挙がる。</li> </ul>
2000	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 神戸市がルミナリエを全面協力するという新体制で、次回からも継続して開催することを決めた。</li> <li>・ 光が多すぎて、震災が起きたときに1つの光がどれほど大切だったかということが表現できていない。</li> <li>・ この年の来場者は全体の6割が県外客で、20歳代が3割以上を超えていた。昨年までと比べると県内からの来場者は減り、県外からの来場者が増加するという結果になった。</li> <li>・ このイベントの評価として、97.6%の人が来年以降も継続してほしいと答えた。</li> </ul>
2006	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ルミナリエのイルミネーションは神戸にある『3つの暗がり』を照らすと述べられた。1つ目が『冬の空』、2つ目が『旧居留地』、そして最後が震災で傷ついた『心』。製作者である今岡氏は「このイベントが歴史に希望を重ね、未来を見つめるイベントであり続けてほしい。」と願っている。</li> </ul>
2007	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 05、06年と2年連続で赤字が続いたため、開催期間を2日減らすことを決定した。</li> <li>・ 協賛金が1996年では5億円もあったが、昨年では2億8千万円にまで減少した。このイベントの企業からの関心が薄れてきていると感じられた。</li> <li>・ 県や神戸市からの補助金が打ち切りとなった。</li> <li>・ 組織委員会の中で、イベント開催の継続についての是非が挙げられた。</li> <li>・ この年にいつの間にか埋もれてしまっていた、当初の趣旨である『被災者の魂の鎮魂と復興』を理解してもらうための新たな取り組みを始めた。</li> <li>・ 朝日新聞で実施した『好きなイルミネーション』というアンケート<sup>18</sup>で、このイベントが1位に認定された。</li> </ul>
2009	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 新しい企画として、東遊園地のそばで、1300本の青いキャンドルに火を灯し、慰霊と復興のモニュメントの周辺で地元大学の生徒が『しあわせ運べるように』などの合唱を行った。</li> <li>・ 屋台のにおいがこのイベントと合っていないという声もある一方、気軽に立ち寄れるところがあるので、参加しやすいという声も挙がっている。</li> </ul>

<sup>18</sup> 朝日新聞 2007年12月11日夕刊に載せられたアンケートを参照。



2010	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年より 21 万 6 千人減ったが、それでもまだ 343 万人が訪れるイベント。</li> <li>・本来の趣旨をもっと重視して、開催を 1 月 17 日に変更したほうがよいという意見が挙がる。</li> </ul>
2011	<ul style="list-style-type: none"> <li>・来場者が減っているにも関わらず、警備費用が増加し続け全体の収支を圧迫している。</li> <li>・慰霊と復興のモニュメントの前で泣いている人を見て、15 年たった今でも震災の悲しみが消えていないこと実感した。</li> </ul>

(出典：朝日新聞 1995 年～2011 年の記事を一部抜粋 筆者作成)

概観してわかることは、人々の関心が一気に高まると共に神戸の復興が進み、一方で経済が不景気に入ると共に方向性のずれていく神戸ルミナリエの様子であろう。

そもそもこのイベントは、元々開催初年で終わらせる予定であったものを周りの絶大な反響から翌年も行うこととなったという経緯がある。この存続の背景には、鎮魂の願いをこめたイベントとして記憶の風化を防ぐ目的以外にも、経済波及効果を狙った集客イベントとしての側面があったように窺える。

実際に、開催の翌年には、神戸経済への直接的効果が 333 億円、波及効果は 395 億円であったとあえて言及する記事が朝日新聞に掲載された程である<sup>19</sup>。また、集客率の高いルミナリエは、国からの支援により冬場観光の目玉イベントとなることを目指した。1994 年の記事では、地元民もこのイベントが神戸の復興に役立っていると考えていることが読み取れる。更に、1996 年の記事にあるように、開催期間がクリスマスとかぶることで会場周辺の施設の売上げが大幅に伸びることが期待されたが、開催費用が 2 億円増加することで地元の協賛企業の負担が大きくなるという問題も、すでに指摘されている。

経済効果で生まれた資金は、復興に向けて会場周辺の家々や商店に大きな影響をもたらしたであろう。しかし、このような大きな経済効果を生んだ一方で、イベントの趣旨である『被災者の魂の鎮魂と復興』という目的が意識されなくなっているように感じられる。朝日新聞が 1996 年 11 月に実施したアンケート結果(回答者 238 人)において、今年もルミナリエを見に行くと答えた人が 8 割を超え、さらに飲食とレジャーも兼ねると答えた人が 6 割を超えた<sup>20</sup>、という結果から、来場者の意識にレジャー・観光の一環として訪れている傾向を読み取ることができる。

神戸の驚くべき復興の速さと発展の根底に、このイベントの経済効果や集客効果が大きくプラスの影響を与えたことを否定するつもりはない。ルミナリエを見ると今でも震災のことを思い出す人も多く、ルミナリエの中に鎮魂という要素が消えていないことは確かであろう。暗闇の中で立ち上がることもできない沈んだ感情を吹き飛ばすような柔らかい輝きは、人々の心に明るい未来を示す希望の輝きでもあった。しかし、ルミナリエは、また別の魅力的な輝きを神戸だけでなく周辺地域及び全国に与えてしまったのだ。復興イベントを謳ったはずのルミナリエは、1997 年すでに旅行会社の商品として扱われている<sup>21</sup>。そして開催 4 年目にしてすっかり神戸の『冬の風物詩』<sup>22</sup>として扱われ、多くの県で神戸ルミナリエ観光としての様々なツアーが組まれたのである。

また、1996 年 7 月 30 日付の朝日新聞朝刊によると、兵庫県は『住宅政策への要望に重点が置かれた昨年に比べ、経済の活性化につながる規制緩和など、産業復興への支援を求めて』おり、神戸ルミナリエを集客イベントとして位置づけることで産業復興へのシフトチェンジを高らかに明示した。開催次年度からすでに経済的な利益を求めだした神戸ルミナリエは、3 年目ですべてに会場での露店を許可した。こうなると翌年 1997 年 2 月には早々と、他の様々な自治体からの引き合いが増加し、企画・制作に携わる大手広告代理店には「同

<sup>19</sup> 朝日新聞 1996 年 11 月 30 日朝刊、参照。

<sup>20</sup> 朝日新聞 1996 年 11 月 30 日朝刊、参照。

<sup>21</sup> 朝日新聞 1997 年 05 月 09 日朝刊、『12 月 12 日開幕 神戸ルミナリエの日程決まる(兵庫)』参照。

<sup>22</sup> 朝日新聞 1998 年 11 月 20 日朝刊、『神戸ルミナリエ観光に日帰り券 JR 西日本米子支社(鳥取県)』参照。

様の催しをできないか」という問い合わせが相次いだ<sup>23</sup>。この頃から、当初の目的である内面的な意義、つまり鎮魂と復興のともし火という二つの方向性から、イベントの成功から生じた経済効果を志向する方向性へと大きく転換してしまった。その結果として、本来の方向性との矛盾を指摘する声に対する正当性を失い、また一方で、経済的な効果が減少したことを理由とする廃止案に対しても継続を主張することができなくなりつつあるのではないだろうか。

### 3-2. 来場者の意識変遷に対する神戸ルミナリエの取り組み

過去には、訪れた来場者が「97.6%の人が来年以降も継続してほしい」<sup>24</sup>と言われていたルミナリエだが、1996年には5億円もあった企業協賛金が2006年には2億8千万円にまで減少し、企業の関心も薄れつつある。その状況に対して組織委員会ではイベント開催の継続についての是非が議論され、2007年にもう一度原点に立ち返り、鎮魂と復興を掲げたイベントとして再出発した。まず、電飾だけを楽しんでもらうだけでなく、会場近くにある犠牲者の名前を刻んだ「慰霊と復興のモニュメント」を消灯時間まで開放し、より多くの来場者の目に留まる工夫をした。週末の民間ステージでは震災の教訓を発表してもらうなどして、震災を起源とするルミナリエの趣旨を理解してもらおうという取り組みもスタートしている。

2009年には、地元の学生たちが、東遊園地のそばで1300本の青いキャンドルに火を灯し被災者遺族の心を鎮め、震災の記憶を次の世代へと引き継いでいけるようにと願いを込めた新しい企画を開催した。そのほかにも、慰霊と復興のモニュメントの周辺で地元大学の生徒が『しあわせ運べるように』などの合唱を行った。このような新たなイベントに被災者遺族の中に涙を流す人もいたという。さらには、開催期間を1月17日に移したほうが『鎮魂と復興』という趣旨をより来場者に理解していただけるのではないだろうか、という意見も挙がっている。

好きなイルミネーション第1位に選ばれるという輝かしい面もある一方、震災の悲しみを忘れることが出来ず、モニュメントの前で涙を流す人もいる。その悲しみの部分は輝かしい一面に埋もれてしまっているが、それは確かにこのイベントに残っている。経済復興に力を入れすぎた故に、鎮魂というルミナリエの掲げる趣旨から実態がぶれてしまったという現状は、主催側および来場者の意識によってイメージの変容しやすいイベントが震災の記憶伝承として機能し得る限界を示しているように思われる。

## 4. 震災モニュメントとその意味

イベントはある一定の期間にしか存在しないが、有形のモニュメントはそこにずっと存在し、過去の記憶をずっと留めていく。神戸には、有形の震災モニュメントも数多く残されている。それらにはどのような意味があるのだろうか。また、訪れた人にどのようなイメージを与えるのだろうか。兵庫県西宮市のモニュメントや慰霊と復興のモニュメント<sup>25</sup>を例にして考えていきたいと思う。

### 4-1. 『慰霊と復興のモニュメント』について

慰霊と復興のモニュメントは、震災の悲劇を風化させないように、また後世に復興の歩みを伝えられるようにという目的で作られた。地下が円形の広間になっており、震災で亡くなられた方々の<sup>26</sup>名前が刻まれて

<sup>23</sup> 朝日新聞 1997年2月24日朝刊、『「神戸ルミナリエ」を復興特定事業に 市・兵庫県、申請へ(大阪)』参照。

<sup>24</sup> 朝日新聞 2000年12月27日朝刊、参照。

<sup>25</sup> 東遊園地にあるモニュメント。2000年より一般開放されている(毎日午前9時～午後5時)。

<sup>26</sup> 亡くなられた方の中から遺族の承諾を得られた名前。名前は震災の年には4517名であったが、震災が遠

いる。神戸ルミナリエと慰霊と復興のモニュメントは、そこに訪れる人を見ると、とても対照的である。写真撮影する人々や露店であふれている神戸ルミナリエに比べて、慰霊と復興のモニュメントは閑散としており、ほとんど人がいない。そこで神戸ルミナリエの期間中、通常より 5 時間近くモニュメントの開放時間を伸ばすことにした<sup>27</sup>。さらに会場の 4 箇所に案内版を設置し、20 分おきにアナウンスを流したがほとんど効果はなかったのだ<sup>28</sup>。

なぜ震災モニュメントに訪れる人が少ないのだろうか。我々は次の 2 点が理由だと考えた。

- ① 見たくない。震災を思い出すのがつらい。
- ② 震災に興味がない。

まず①についてだが、遺族の多くがこの感情を抱くのではないだろうか。事実、2010 年に読売新聞が実施したアンケートでは 47%の人が、「未だに震災の悲しみが和らいでいない」と回答した。彼らにとっては、震災モニュメントは悲しみの記憶の象徴であり、見るとつらい気持ちが起こるのだろう。しかし残りの 53%は「徐々に震災の悲しみが薄れつつある」と回答し、中には「もう震災を過去のものにしても良いのではないか」という回答も見られた<sup>29</sup>。このような人々は、震災があった事実は忘れないが、震災による悲しみは忘れたく、震災モニュメントに訪れることによって再び悲しみがよみがえることが怖いのではないだろうか。

次に②についてだが、これは震災後に生まれた子供たちや、震災後に神戸に来た人たちなど、震災を直接知らない人たちが増えたからだと考えられる。我々は当時 4 才だったが、震災の記憶はほとんどない。同じように、当時小さかった子供や、震災後に生まれた子供たちにとっては、現在の神戸が標準であり、ボロボロになった建物や、人々の苦労を想像できないのだ。だから日常生活の中で震災について考えることはほとんどない。また、新しく市外から神戸に来た人たちにとっても同様である。このように震災を直接知らない人たちにとっては、震災モニュメントとは単なる風景であり、訪れる理由が見つからないのではないだろうか。

では、震災モニュメントに訪れないことは悪いことか。我々はそうは思わない。なぜなら震災について考えないということは、それだけ神戸が復興し、私たちが平和に幸せに暮らしているという証拠だからだ。むしろ普段の生活の中で震災について考えることが多いというのは、まだそれだけ震災の爪あとが大きいということなのではないだろうか。しかし、震災があった事実は残していくべきだと考える。事実を残すものとして、モニュメントはとても相応しい。イベントは時と共に趣旨が変わったり、変容したりする恐れがあるが、モニュメントは一時をずっととどめていくからである。普段は私たちの生活風景の一部かもしれないが、ふとした瞬間に立ち寄った時、震災について考えてもらえるきっかけになれば、震災モニュメントは十分意味のあるものではないのだろうか。

## 4-2. 震災モニュメントの例

では、事例として兵庫県西宮市の震災モニュメントをいくつか紹介する。

一つ目は西宮市高木小学校の復興の鐘である。この鐘がある目的は、震災の起こった毎年の 1 月 17 日に 5 回鳴らすためである。それは、震災で亡くなった 5 名分の児童への呼びかけという意味をもつ。

二つ目は、西宮市久々谷町にある夙川小学校から徒歩 10 分ほどのところにある「心やすらかに」と書かれた石碑である。4 年生の女子児童と 1 年生の弟、2 人の児童と校区の 55 人の霊を弔う目的で建てられた。

三つ目は、西宮市宮前町の浜脇中学校の校庭隅にある、リンゴの植樹である。この木を植えたのは 95 年

---

因で亡くなられた方々も年々追加されている(2011 年 12 月現在 4921 名)。

<sup>27</sup> 読売新聞 2008 年 12 月 17 日夕刊、参照。

<sup>28</sup> 読売新聞 2009 年 12 月 17 日夕刊、参照。

<sup>29</sup> 遺族 202 人が回答。

に結成された「西宮リンゴ並木後援会」である。何故リンゴの木なのか。後援会事務局長の岩瀬利治さんは出身地の長野県飯田市で、47年に市街地の約8割が焼ける大火に遭った。その時人々を励ましたのは、焼け跡に流される並木路子さんの「リンゴの唄」だった。岩瀬さんらは、復興に願いを込めたリンゴの並木の整備を飯田市に提案し、それが採用されて市の観光名所となった。岩瀬さんはその後西宮市で震災を体験し、大震災と飯田市を重ねて、復興の願いを込めて中学校へ植樹を行ったのである。

上記で紹介したモニュメントの意義について、共通点が指摘できる。それは、震災で亡くなった方々の弔い、そして震災で生き残った人々の想いを伝えていくことである。

復興の鐘がある小学校の当時の校長、荒巻勲さんは「5人の慰霊碑であると同時に、震災に負けずに強く生きて欲しいという子供への思いを表現したかった。命のはかなさ、そして強さとやさしさ。子供たちも私たちも身をもって知った。あの時の気持ちを忘れないよう、いつまでも鐘の音を響かせていきたい」<sup>30</sup>と述べている。

リンゴの植樹がある浜脇中学校の校長、坂東校長は、「6本の木が1年に1度実をつける時に、ふと由来を思い出し、震災で亡くなった先輩達の命にそっと心の中で手を合わせてくれれば」<sup>31</sup>と願っている。このように、建てられた当時の想いや願いがそれぞれに込められている。

### 4-3. 震災モニュメントの課題

建てられた当時の人々の想いを伝えていくには、主に2つの課題があると考えられる。

まず一つ目は、情報の発信不足である。我々の中にも西宮市に住んでいた者がいるが、このようなモニュメントの意味どころか、存在すら知らなかった。当時の人は知っていたかもしれないが、震災の記憶があまりない世代や、経験していない世代には伝わっていない。もっと伝えていくためには、各地でイベントなどをして人を集めることが必要なのだ。

二つ目は、そのイベントを被災者が生きている内にすることである。もし、被災者の方々が亡くなった後に、そのようなイベントができたとする。そして、そのイベントに多くの来場者が訪れたとしても、震災に遭った実際の経験談がなければ、そのイベントの真の意味が失われる可能性がある。それはもはや「震災イベント」とは言えないのである。神戸ルミナリエのようにどの震災イベントも、年数を重ねるに従って費用面から実施できるのかという経済的問題が出てくる。一方で、その中でも震災の体験を語り継いでいかなければ、震災は人々に忘れ去られる可能性がある。だからこそ、生きている体験談が必要であるのだ。イベントの中で体験談が語られた看板を建てる、被災者の方々の話しを聞くコーナーを設けるなど、そのイベントに沿った工夫を欠いてしまうと、単なる人集めのイベントとなり、本当の目的を失ってしまう。

しかし、このように人に依存する部分の多い無形のイベントは経年的に意味が変わる可能性が高い。しかし、有形のモニュメントの伝えるメッセージは変わらず、その当時のリアリティーが維持される。ここに、モニュメントを残す意味があるのである。震災の記憶を伝えるものとしては、有形遺産としてのモニュメントは不可欠であり、意味や目的が見失われがちな震災イベントに組み込むことで、震災を語り継ぐための有効な手段となる可能性もあると考える。

## 5. 結論

<sup>30</sup> <http://www1.plala.or.jp/monument/m-nishinomiya.html> 17, 高木小学校 復興の鐘、2012年11月16日、参照。

<sup>31</sup> <http://www1.plala.or.jp/monument/m-nishinomiya.html> 26, 浜脇中学校 リンゴの植樹、2012年11月16日、参照。

結果として、震災イベントとして何か新しいものを立ち上げるときに生じるであろう課題は、本来の目的のまま継続することと、経済的に継続していけるかどうかの2点であると考えられる。ルミナリエの場合、本来の目的である鎮魂および（心の）復興というテーマは、震災の犠牲を思い起こす『過去の記憶』という方向性と、明るい未来への歩みという『前進の証明』という方向性に区別されるだろう。この二つの方向性は一見共存が可能に見えるが、イベントとしてのもう一つの側面である経済的効果に注目が集まることで、『過去の記憶』という目的がもつ厳粛性・儀礼性との矛盾が浮き彫りになってきたのである。神戸ルミナリエにおいては、1997年、連続して開催されるようになって3年目で既に観光客からはルミナリエを開催する意味やその意義を活かす統べを最大限に引き出すことが出来ていないと意見されており<sup>32</sup>、この相反する問題点に関わる様々な意見の狭間で身動きが取れなくなっている様子が伺える。

この矛盾を解決するためには、鎮魂と復興というテーマを切り離すことが必要ではないだろうか。経済的な効果は街の『活気』と直接的につながるものであり、復興をアピールするという未来志向のテーマと合致する。一方で、鎮魂や記憶の伝承というテーマは、こうした商業化しやすいイベントではなく、厳然たる真実の記憶を伝え続ける有形のモニュメントを保全し公開することで達成されるべきである。

今後、東日本大震災を祈念したモニュメントやイベントが多く出現してくると思うが、その際には、それらを完全に切り離して考えるべきである。沖縄県のひめゆりの塔のように、未来永劫語り継がれるためのモニュメント、復興していくその地の活力を祝うためのイベント。2つを融合させれば、モニュメントのある場所でのイベント開催をすれば良いのではないだろうか。

漆黒の闇の中で浮かぶルミナリエの姿は、震災当時、一切のライフラインを絶たれた神戸の街でみた第一回目の光と重なるはずである。だからこそ、その中でみるあの光は、いつまでも変わらないものであるべきなのではないだろうか。だが神戸のこの光に集まる人々は、必ずしもルミナリエ本来の意味を知ってやって来るわけではない。近年、芸術として確立されつつあるイルミネーションイベントを「光の祭典」として各々のスタイルで楽しめばよいのではないかという意見も出ている<sup>33</sup>。観光客が求める“希望”や“未来”を各々で見出してもらえることができたのなら、それが真の神戸ルミナリエであり *luminarie* “祝祭のためのイルミネーション”なのではないだろうか。我々はこの芸術的かつ国際的な可能性をもつこのイベントを、甚大な震災被害からの復興の象徴という観点で歴史的・文化的意義を捉え、かつ観光資源として発展させる価値のあるものとして改めて定義しなおすべきだと考える。そして、東日本大震災に際して、地震被害を伝えるモニュメントの保全と並行して、被災地の復興の活力を伝える無形の観光文化資源の支援をナショナル・トラストの活動に盛り込むことをここに提案したいと思う。

---

<sup>32</sup> 朝日新聞 2000年12月21日朝刊、オピニオン『ルミナリエに周囲の光邪魔（声）』参照。

<sup>33</sup> 朝日新聞 2004年12月11日朝刊、オピニオン『洗礼された光、各々楽しめば 光のショー（声）』参照。